

論文審査の結果の要旨

氏名：原 田 英 誉

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：下顎神経切断によるラット耳管開放症モデルの確立

審査委員：（主査） 教授 鈴木 孝 浩

（副査） 教授 岩 崎 賢 一 教授 逸 見 明 博

教授 木 下 浩 作

耳管開放症は体重減少、加齢、妊娠などの誘因で発症し、自声強聴、自己呼吸音聴取、耳閉感などの症状を呈する疾患である。耳管開放症の治療として、これまで多数の保存的あるいは外科的治療が行われてきたが、治療効果の持続性や根治性の点でまだ解決されていない点を多く含んでいる。今後さらなる病態解明や有効性の高い治療の確立には、耳管開放症の再現性の高いモデル動物が必要と考えられた。そこで三叉神経第3枝である下顎神経の切断により耳管開放症モデルを作成できるかを、生理学および形態学的にその妥当性を検討することを本研究の目的とした。ラット8匹を対象に、麻酔下に外切開を加え、卵円孔から翼突窩に出る部分で一側の下顎神経を切断し、その後の耳管機能の評価として加圧法による **passive opening pressure (POP)** の測定を術後16週まで継続した。その結果、非手術側に比し、下顎神経切断側では **POP** が術後2週より有意に低下し、術後16週まで持続した。この **POP** 低下は対象とした全例で観察され、再現性が高いことがわかった。術後16週目で耳管周囲の組織標本作製し、形態学的にも評価したが、下顎神経切断側では耳管機能に関連する内側翼突筋の萎縮が観察された。ラットの下顎神経切断術により、生理学的そして形態学的にもヒトにおける耳管開放症を比較的容易に、かつ持続性に再現できるモデルとなり得ることが示された点で、本研究結果は今後、耳管開放症の病態解明に関する研究や有効な治療法の検討に寄与できる可能性が高いと判断された。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以 上

平成 31 年 2 月 27 日